

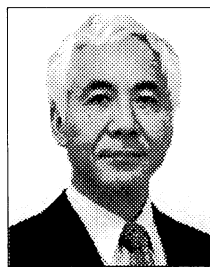
【巻頭言】

●

夢幻の如し - リアリティとイリュージョンの狭間に -

湯山一郎

NHK-ES



立体ハイビジョンはきれいだ、木のこずえとこずえの間を渡っていく風すら感じさせることができる。海の中の魚は、目の前を泳ぎ、手に触れることもできそうではないか。でも本当にこの方向でいいのだろうか。我々は何を表現しようとしているのか。原始の時代に沸き立つ生命のイメージ化は正しい方向である。なぜなら、誰一人として見たことがないからである、想像の世界が各人異なり、その結果それぞれ違うように映像を認識したとしても、何の問題も生じないからである。ただし、制作者と私が同じものを認識しているかどうかは保証されていないのであるが。

ところが、人間を撮影の対象とし、我々のいつも生活している空間を対象とした時から話が違って来る。立体ハイビジョンで最初に撮ったのは、NHKの音楽番組でジュディオングの出演する番組だった。「きれい、なんて、かわいいんだ」、そうジュディさんはかわいいよね。でもその後がよくない、「箸でつまめそうだ」これが、「小人効果」。何でそうなるのかは、山之上君他の論文を読んでください。問題は、立体ハイビジョンを見て感じる大きさと、我々がジュディさんを人として思っている大きさが異なることにあるのだ。今回はプロジェクター特集とのこと、どこへ何を投影するのか。スクリーンに投影されている映像は最終的には我々の内部に働きかけ認識される。ここまで、映像は責任を持たないといけない。仏教では、「唯識」と言っている。「唯識」の話は奥が深くて何度もどんでん返しを喰らうのだから、ごく初期段階としては「この現実世界は、我々自身が自分の認識力によって作りあげたイメージ世界である」と言える。ならば、バーチャルであれ、

リアリティであれ、イリュージョンであれ、そのことを区別する必要はもとよりないかも知れない。リアリティを追求するということは、実体と実体から生じる映像とが、いつかは同一と考えることができるということ信じることである。

映像はどこか哀しいメディアである。音の世界は環境が表現できる。耳をふさがない限り音は暴力的に我々に影響を及ぼす。音の表現能力は、ほぼ現実を再現できるまでになっている。一方映像は、現実そのもの全てが送られるのではなく、フレームとして切り取られ、加工されて人々に届けられる。しかも表現された映像は、受け手にとって環境の一部でしかない。現実がフレームで切り取られ映像にされた瞬間から、制作者の意図が存在する。どのような映像も人にイリュージョンを与えることを意識している。その意味で、テレビが現実そのままを伝えていると主張することはできない。制作者の意図の入っていない映像はない。先ごろ、スペースシャトルからの見た地球を立体映像化した。できるわけがない。地球は人が眼で見て認識するには大きすぎる。しかし我々はなんとなく丸い地球をイメージしている。誰も「小さな地球だな」とは言わなかった。まさに我々は目でものを見ているのではなく、脳でそれまでの経験に照らして想像し、見ている気になっているからである。モノクロ、カラー、立体と、より技術的に高度になったシステムは、人々の想像力を掻き立てる余地を少なくし、逆により精微な表現を要求する。ヨーロッパにおける絵画が、ひたすら現実をいかに表現するか、さらにはいかに三次元を二次元で表現するかを求め、

そして行き詰まった。立体ハイビジョンを手がけて10年以上になる。

確かにある意味で表現能力は高くなった。だが、この問題は解決されていない。木のこずえとこずえの間を渡っていく風を捉えられるわけがない。こずえとこずえの存在と動きが風があるかの如く表現しているのである。海底の生命体はうらやましい、ひょっとしたら遠い昔、我々もあそこにいたのかもしれない。

【略歴】

湯山一郎 (YUYAMA Ichiro)

昭和46年、東京生まれ。昭和45年東大電気工学科卒業。同年NHKに入局、昭和50年よりNHK放送技術研究所にてハイビジョンのシステム設計、信号処理、画像符号化の研究、EDTV、立体テレビの研究開発に従事。立体テレビ、デジタルテレビを含む次世代テレビの研究を指導推進した後、現在、NHK-ES情報家電研究室長として、放送における情報家電の研究を推進。